

[書評] ジョン・ストット、クリストファー・J・H・ライト
『今日におけるキリスト者の宣教』

篠原基章

キリストと世界 29号抜刷 2019.3.1

[書評] ジョン・ストット、クリストファー・J・H・ライト

『今日におけるキリスト者の宣教』¹

篠原基章

(東京基督教大学准教授)

この著作は1975年に出版されたジョン・ストット (John Stott, 1921-2011) による *Christian Mission in the Modern World*² の拡大・増補版である。ジョン・ストット遺書管理遺言執行者とインターヴァーシティ・プレスの要請により、ストットの愛弟子であり、後継者でもあったクリストファー・J・H・ライト (Christopher J. H. Wright) がこの古典的著作を改定・再編集すると共に、各章においてライトが応答する形で議論が深められている。

この共著は単にストットの古典的著作をより現代的に改訂することに留まらない。ライトは、ストットの原著を現代的な読み手に届くように再編集するだけでなく、1975年以降の数十年に渡る議論を踏まえ、時にストットの先見の明と神学的方向性的確さに驚嘆し、師であるストットが提唱した神学的理解や方向性を発展させつつも、時には師と意見を異にしている。各章の主題に関してストットが他の著作でより丁寧に論じている場合は、脚注に参考資料として記されている。これはストットのほぼすべての著作に目を通してライトならではの貢献である。それゆえ、この書物はジョン・ストット研究としても位置付けることができるであろう。また、1975年以降の宣教の神学に関する様々な議論についての参考文献が巻末の脚注に記されており、宣教の神学を研究しようと志す人々の入門書としても位置付けられる。また、この著作は20世紀の宣教の神学と21世紀の宣教の神学の架け

-
- 1 ジョン・ストット、クリストファー・J・H・ライト共著、立木信恵訳『今日におけるキリスト者の宣教』いのちのことば社、2016年 (原著: John Stott and Christopher J. H. Wright, *Christian Mission in the Modern World Updated and Expanded*, Downers Grove: InterVarsity Press, 2015.)
 - 2 John R. W. Stott, *Christian Mission in the Modern World*, Church Pastoral Aid Society, 1975.

橋としての役割を果たしている。

ストットは英国国教会に属する教職者であり、福音派における宣教運動を牽引した世界的な指導者である。1974年に開催された第一回ローザンヌ世界宣教会議の中心的指導者であり、この会議を経て採択された『ローザンヌ誓約』(The Lausanne Covenant)の起草者でもある。1975年に出版されたこの原著は、『ローザンヌ誓約』の注解書として位置づけることができるであろう。すなわち、この著作においてストットは『ローザンヌ誓約』が生み出された背後にあった複雑かつ多様な議論の論点を整理しつつ、聖書的理解を模索しているからである。原著において、ストットは「宣教」、「伝道」、「対話」、「救い」、「回心」という5つの用語を取り上げ、それらを聖書的に定義することを試みている。

ここで重要なことは、「聖書的」という部分である。20世紀における宣教に関わる様々な議論は、エキュメニカル派と福音派の対立に似た関係性において展開されてきたが、ストットが目指すのは自分が属する福音派の理解を単にオウム返しのように擁護することでも、エキュメニカル派を一方向的に糾弾することでもない。エキュメニカル派の議論に丁寧な耳を傾けつつ、また時には福音派の誤りと思われる部分に対しては批判的な考察をも加えている。ストットが、「私のおもな関心事は、エキュメニカル派と福音派のそれぞれの考えを、中立かつ客観的に、つまり聖書に照らし合わせて検証していくことにある」(17頁)と述べている通りである。

共著者であるライトは2010年に開催された第三回ローザンヌ世界宣教会議において決議された『ケープタウン決意表明』(The Cape Town Commitment)の中心的起草者である。ストットとライトは師弟関係を越えた深い同労者の絆で結ばれている。ライトはストットの後継者としてローザンヌ運動の神学委員長の責任だけでなく、福音派における聖書研究の深化と聖書の説教者の育成のためにストットが設立したLangham Partnershipの働きをも受け継いだ。

ライトとストットの出会いはライトが神学生であった頃にさかのぼる。ライトがケンブリッジ大学リドリー・ホールの神学生であった時、ストットのこの原著を含む著作を読み、福音主義神学の復活に大きな励ましを受けたという。ライトにとってストットは生涯にわたる英雄であり、良き指導者(メンター)であり続けた。ライトはストットの宣教の神学の分野における貢献と方向性を単に継承するだけでなく、ライト自身の専門分野である旧約聖書に関する研究の蓄積から深化・発展させてきた。この書評では宣教理解に絞って論じることとする。

『ローザンヌ誓約』に結実された宣教理解は、福音派の宣教理論に決定的な影響

を与えた。それまでの「宣教=伝道」の図式から、「宣教=伝道+社会的責任」という包括的（ホーリスティック）宣教理解への転換がなされた。ストットは自分自身の宣教理解が狭められていたことを率直に認め、宣教は神がご自身の民になさせようとお遣わしになっている「すべてのこと」であると論じた。この理解への転換となった神学的理解は、「神の宣教」（*missio Dei*）という概念であった。宣教は贖い主なる神の性質に基づいており、宣教の起源は教会にではなく、神ご自身にあるという理解である。これは20世紀の宣教思想史において結実した宣教理解であり、いまやカトリック・正教会・エキュメニカル派・福音派において共通の宣教理解となっている。しかし、その理解は一枚岩ではなく、それぞれの宣教理解の枠組みにおいて用いられてきたために概念のインフレーションが生じてしまった。

「神の宣教」という理解はエキュメニカル派において活発に議論がなされてきたが、ストットはその議論に慎重に耳を傾け、聖書に照らしてその理解を検討し、自分自身の宣教理解の誤りを認めた。しかし、それはエキュメニカル派の議論の全てを受け入れたということではない。聖書に照らし合わせるという聖書学的精査のプロセスを通して、受け入れるべきところは受け入れ、聖書的に受け入れがたいと判断されるべき部分に関しては聖書的な議論をもとに是正されるべきであると論じた。

ライトはこの「神の宣教」という神学理解を、聖書全体に記されている壮大な神の宣教の物語として捉え、その理解は『ケープタウン決意表明』において実を結んでいる。また、日本語にも訳された『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』（東京ミッション研究所選書シリーズ14）において詳細に論じられている。この書物は13年ともいう構想期間を経て生み出されたライト渾身の著作である。ライトは、ストットが指し示した宣教理解の方向性を自分自身の研究分野である旧約聖書研究において深め、宣教概念を聖書全体をつらぬく壮大な神の宣教の物語として位置づけた。

さらにライトは宣教を神学の一つのテーマとしてではなく、神学の「中心・核」として位置づけることを提唱している。この理解は聖書を「神の宣教」と「神の民の宣教」という観点から聖書全体を読み解こうとする「宣教的解釈学」（*missional hermeneutics*）の理解に基づいている。ライトはオール・ネイションズ・クリスチャン・カレッジの聖書課程の教授として、「宣教の聖書の根拠」という授業を担当していた。しかし、その授業を講じるなかで、宣教は聖書が取り扱っている様々な事柄の一つではなく、聖書そのものが語る中心であることに思い至り、「聖書の

「宣教的根拠」という講義タイトルに変更したいと考えるようになったというエピソードが紹介されている（58頁）。

このような理解は、神学、そして神学校のカリキュラムの在り方に対しても問いを投げかけている。通常、神学校のカリキュラムにおいて宣教学は実践神学のカテゴリーに入れられるが、それは神学的に正しい位置づけであるといえるのだろうか。確かに宣教学は実践的な宣教的課題を取り扱う。しかし、もし神の宣教が聖書の中心テーマであるとするならば、少なくとも「宣教」という理解は神学、そして神学校のカリキュラムにおいて中心に据えられべきではないだろうか。これは決して宣教学が神学教育をハイジャックするという意味ではない。神学の一分野に宣教があるのではなく、宣教の神と神の民の宣教の使命のゆえに神学という学びがあるという位置づけこそ聖書的な理解ではないかと考えるのである。

この著作が日本語に翻訳された意義は大きい。福音派の宣教の神学の骨格はストットの貢献に負うところ大であることは誰もが認めるところであろう。ライトはそれをさらに深化させることに貢献し、また今後の議論のさらなる深まりを促している。この著作は聖書に基づく宣教の神学を学ぼうとする人々に対する最適な入門書である。「宣教」、「伝道」、「対話」、「救い」、「回心」の5つのテーマは互いに有機的に結びついており、そのひとつひとつが宣教の神学の屋台骨といっても良いテーマである。いずれのテーマであれ、この著書に記されている議論、引用、参考文献はまさに研究者にとって金鉱である。

また、既に指摘した通り、この著作を「ジョン・ストット研究」として捉えることもできる。ライトの指摘によると、ストットはどのような課題であれ、常に「聖書は何と言っているか」、「これはどのように聖書から示されていて、特にキリストにおいて現わされている神の性質や目的、また業と関連しているのか」という視点から考察した。ライトはこれこそストットの特徴的な思考パターンであると述べている（50頁）。また、ストットの神学的なスタンスは、常に神中心であり、聖書を基盤とし、その焦点にはキリストを据えていた。この神学的なスタンスは福音主義の伝統に根差したものである。また、この著作に記されているジョン・ストットに関する様々なエピソードを通し、読者はストットの靈性に触れる貴重な経験をすることができる。その靈性はストットの意志を継ごうとする者たちだけでなく、全ての研究者や宣教従事者の模範となるであろう。